

漢字・カタカナの混淆文を読む その1

— 『今昔物語集』(京都大学附属図書館蔵国宝、鈴鹿本) —

萩原 義雄

はじめに

これまで、ひらがな・カタカナについて基礎的な事柄について学習を深めてきました。ここで、漢字とカタカナとを混淆して仕立てられた文章を読みたいと思います。資料としては、京都大学附属図書館所蔵の国宝鈴鹿本『今昔物語集』(HP「[透過インタフェース版](#)」及び「[動インタフェース版](#)」、「[スタンダード版](#)」)を基にこの学習を進めていきます。

三十一巻から成る仏教説話集及び世俗説話集のなかで、天竺(インド)巻一～五、震旦(中国)巻六～十、本朝(日本)巻十一～三十一の三国世界を部ごとにそれぞれの説話譚を収載しています。現存する舊鈴鹿藏本(巻八、十八、二十一)は他写本共欠本については、[京都大学附属図書館が所蔵](#)しています。その成立年代は、保元(一一二〇)年頃を上限とする資料です。この説話解説については、紀田順一郎『日本の書物』の『[今昔物語集](#)』を参照なさってみてください。

『今昔物語集』に於ける国語資料としての意義

直接会話の表現は、写実性をもって蘇ってきます。漢文訓読文とは異なる、日本語式文体がその読みやすさを感じさせてくれます。問題は、漢字にて表記されたことばである漢語や和語をどう訓むのかということになっていました。この説話数一千二十に及ぶ全文の解説が近代日本において始まったのです。というのも、古川千佳さんの解説にあるように、『今昔物語集』は内包する多様性、迫力ある描写、等々さまざまな魅力をもつ作品であるにもかかわらず、その名が後行現存の文献中に登場するのは室町時代の僧・大乘院経覚の日記『経覚私要鈔』宝徳元(一四四九)年七月四日の条「四日、霽、夕立、今昔物語七帖返遣貞兼僧正畢、……」が初めてであるからです。中世を通して他に現われず、次に出てくるのは近世初期ともいえる『多聞院日記』の天正十一(一五八三)年十一月八日条「……今昔物語十五帖大門二在之 南井坊へ返遣了」となっています。古本系といえども、伝写本のほとんどが近世以降のものであることを考え合わせますと、『今昔物語集』は鈴鹿本が中世初期に書写された後、長い眠りについていたと考えられる」とあることがこの資料の流布が遅れたことを如実に知らしめています。これと同時に、写本資料の補修、そして複製本刊行、さらには、インターネット上による全面資料公開がなされるに至ったことがこの資料を近年、第一級品の資料としての価値を人々が認め、研究利用が容易になったことが指摘できます。このことは、若い国語学・国文学の研究利用者にとって朗報をもたらせました。この研究に欠かせない解説テキスト・データをいち早く利用できるように整備したことは、利用した者のみが知る至福なのかも知れません。その至福を次の研究者に伝え継承していく、そのうえで、この『今昔物語集』は、絶好のテキストに成りえたということです。この経緯を文学部教授安田章さんが[鈴鹿本 今昔物語集をめぐる](#)「[京都大学附属図書館報「静修」Vol. 28, No. 3 \(一九九一年十二月発行\)](#)」に書きとどめています。

『今昔物語集』本文の実際

ここで、実際の現なる資料のなから、天竺部・震旦部・本朝部から各々一話ずつを眺めておきましょう。

天竺異形天人降語第三十五(卷第二)

今昔、天竺三天ヨリ一人ノ天人降タリ。其ノ身、金色也。但シ、頭ハ猪ノ頭也、諸ノ不淨所生ノ類ヲ求メ食ス。諸ノ人、此ノ天人ヲ見テ奇異ノ思ヲ成シテ、佛ニ白テ言サク、「此ノ天人、前世ニ何ナル業有テカ、身ノ色金色也ト云ヘドモ、頭ハ猪ノ頭也、諸ノ不淨所生ノ類ヲ求メ食スル」ト。佛、説テ宣ハク、「此ノ天人ハ過去ノ九十一劫ノ時、毘婆尸佛ト申ス佛、世ニ出デ給ヘリ。其ノ時ニ此ノ天人、女人ト生レテ人ノ妻ト有リキ。其ノ家ニ沙門来テ乞食シキ。夫、金ヲ施セムト云ヒシニ、妻、慳貧ナルガ故ニ心ヲ誤マリ、面ヲ赤メテ瞋恚ヲ発シテ夫ノ乞食ニ金施スル事ヲ止テキ。其ノ罪ニ依テ、其ノ妻九十一劫ノ間、此ノ果報ヲ得タル也。又身ノ金色ナル事ハ、[v.2.p.147-148]其ノ沙門ニ値テ一度腰ヲ曲テ礼拜シキ。其ノ功德ニ依テ金色ノ身ヲ得テ光ヲ放ツ也。然レバ天ニ生タリト云ヘドモ、惡業ノ残レル所、如此也」ト説給ケリトナム語り傳ヘタルトヤ。

と云つた具合に、漢字とカタカナの表記をそのまま訓読していくことが出来ます。漢文のように返り点を用いて返読する形態を既に脱却していることが判明します。ですが、漢字表記の文字を和語で読むのか漢語で読むのかを決定することは、書き手から読み手に委ねた読解能力に及んでいません。たとえば、この譚のなかに「頭」とある文字をどう読むか、前後の文脈を理解したうえで読むことが必要とされてきます。前文に「身」ということが用いられていますから、和語読みと考えて良いことになりましょう。ですが、和語におけるこの語の読みには「かしら」「あたま」と二語の訓があります。このいずれかを分別することが問われてきます。これと同じように「妻」という語も「め」と「つま」という二通りの読みが考えられます。みなさんは、これをどう判断しますか？また、すべてを和語で読むことはありません。この譚では、「天竺」「天人」「金色」「不淨所生」「奇異」「前世」「業」「過去」「九十一劫」「毘婆尸佛」「女人」「沙門」「乞食」「慳貧」「瞋恚」「果報」「一度」「礼拜」「功德」「惡業」などといった仏教語性の熟語は、字音語読みが先に立つものと推測すべきものでありましょう。これらを想定し、當代の觀智院本『類聚名義抄』や『色葉字類抄』といった古辞書資料、經典音義書、訓点語彙などを以て比較検証を試みていくのです。現代の学術研究では、此等の語彙については、索引及び語注釈書を基本とした国語辞典に収載がなされ、特に小学館『日本国語大辞典』第二版や角川『古語大辞典』などを繙くことでこれらの用例を含めて意味内容を知ることが可能となつてきています。であります。まずは、先に記述した比較資料を再度、ご自身で丹念に確認していくことも忘れてはならないことではないでしょうか。こうすることで、これらの語の特徴をより理會することに繋がるからです。同じように、震旦部も見てみよう。

震旦法花持者、現脣舌語(卷第七)

今昔、震旦ノ齊ノ武成ノ代ニ、并洲ノ東ノ看山ノ側ニ、人有テ地ヲ堀ルニ、一ノ所ヲ見ルニ、其ノ色黄白也。人、此レヲ恠テ善ク尋ネ見レバ、其ノ形、人ノ上下ノ脣ノ似タリ。其ノ中ニ舌有リ、鮮ニシテ紅赤ノ色也。人皆、此レヲ見テ恠ムデ、帝王ニ此ノ由ヲ奏ス。帝王、此ノ事ヲ廣ク尋ネ問ヒ給フニ、此事ヲ知レリト云フ人无シ。其ノ時ニ、一人ノ沙門有テ、奏シテ云ク。「此レハ、法花經ヲ讀誦セル人ノ六根ノ不壞ザル事ヲ得タル脣・舌也。法花經ヲ讀誦スル事千返ニ滿タル、其ノ靈驗ヲ顯セル也」ト。帝王、此ノ事ヲ聞テ驚テ貴ビ給フ。其ノ時ニ、法花經ヲ受持セル人、皆、此ノ事ヲ聞テ、其ノ脣・舌ノ所ニ集マリ来テ、脣・舌ヲ圍繞シテ經ヲ誦ス。纒ニ初メテ音ヲ発ス時ニ、此ノ脣・舌一時ニ鳴リ動ス。此レヲ見聞ク人、毛豎チ希有也ト思フ。此ノ□□亦帝王ニ奏スルニ、詔シテ石ノ箱ヲ遣シテ、其ノ中ニ此ノ脣・舌ヲ納メテ、室ニ移シ置キ給テケリトナム語り傳ヘタルトヤ。[v.7.p.33-34]

ここで、和語動詞訓「恠」「豎チ」などが注意すべき語でしょう。返読式の不読字「不」の語が一つだけ見え、これは「はさざる」と読むところです。字音語は、「震旦」「齊」「武成」「看山」「黄白」「上下」「紅赤」「帝王」「一人」「沙門」「法花經」「讀誦」「六根」「千返」「靈驗」「受持」「圍繞」「經」「誦」「発」「一時」「動」「希有」「奏」などが拾えます。

最後に、本朝部を見てみよう。

羅城門登上層見死人盗人語第十八(第廿九)

今昔、攝津ノ國邊ヨリ盜セムガ為ニ京ニ上ケル男ノ、日ノ未ダ明カリケレバ、羅城門ノ下ニ立隠レテ立テリ

ケルニ、朱雀ノ方ニ人重ク行ケレバ、人ノ静マルマデト思テ、門ノ下ニ待立テリケルニ、山城ノ方ヨリ人共ノ数来タル音ノシケレバ、其レニ不見エジト思テ、門ノ上層ニ和ヲ搔ツリ登タリケルニ、見レバ、火鬚ニ燃シタリ。盗人、「恠」ト思テ、連子ヨリ臨ケレバ、若キ女ノ死テ臥タル有り。其ノ枕上ニ火ヲ燃シテ、年極ク老タル嫗ノ白髮白キガ、其ノ死人ノ枕上ニ居テ、死人ノ髮ヲカナグリ抜キ取ル也ケリ。盗人此レヲ見ルニ、心毛不得ネバ、「此レハ若シ鬼ニヤ有ラム」ト思テ怖ケレドモ、「若シ死人ニテモゾ有ル。恐シテ試ム」ト思テ、和ヲ戸ヲ開テ、刀ヲ抜テ、「己ハ己ハ」ト云テ走り寄ケレバ、嫗手迷ヒヲシテ、手ヲ摺テ迷ヘバ、盗人、「此ハ何ゾノ嫗ノ此ハシ居タルゾ」ト問ケレバ、嫗、「己ガ主ニテ御マシツル人ノ失給ヘルヲ、繚フ人ノ无ケレバ、此テ置奉タル也。其ノ御髮ノ長ニ餘テ長ケレバ、其ヲ抜取テ鬘ニセムトテ抜ク也。助ケ給ヘ」ト云ケレバ、盗人、死人ノ着タル衣ト嫗ノ着タル衣ト抜取テアル髮トヲ奪取テ、下走テ逃テ去ニケリ。然テ其ノ上ノ層ニ死人ノ骸骨ゾ多カリケル。死タル人ノ葬ナド否不為ヲバ、此ノ門ノ上ニ置ケル。此ノ事ハ其ノ盗人ノ人ニ語ケルヲ聞継テ此ク語り傳ヘタルトヤ。

この譚は、芥川龍之介が短編小説『羅生門』とした原文章として知られるものです。ここでは、字音語が「京」
「羅城門」「朱雀」「門」「上層」「連子」「白髮」「死人」「層」「骸骨」などと僅かな使用になっていることが知られます。これに対して、和語の使用が増加していることも、

「盗」「為」「上」「男」「日」「未ダ」「明カリ」「下」「立隠レ」「立」「方」「人重ク」「行」「人」「静マル」「思」「待立」「山城」「人共」「数来」「音」「其レ」「不見エジ」「和ヲ」「搔」「登」「見レ」「火」「鬚」「燃シ」「盗人」「恠」「思」「臨」「若キ」「女」「死」「臥」「有リ」「其ノ」「枕」「上」「年極ク」「老」「嫗」「白キ」「居」「髮」「抜キ取ル」「也」「此レ」「見ル」「心」「不得ネ」「若シ」「鬼」「有ラ」「怖」「有ル」「恐シ」「試ム」「戸」「開」「刀」「抜」「己」「云」「走リ寄」「手迷ヒ」「手」「摺」「迷ヘ」「此」「何」「問」「己」「主」「御」「失」「給ヘ」「繚フ」「无ケレ」「此」「置」「奉」「御髮」「長ケレ」「其」「抜取」「鬘」「抜ク」「助ケ給ヘ」「云」「着」「衣」「髮」「奪取」「下走」「逃」「去」「然テ」「上」「多カリ」「葬」「否」「不為」「此ノ」「置」「事」

「語」「聞継」「此ク」「語り傳ヘ」

と一目瞭然にして確認できます。この和語語彙を漢字で表記することは、その文字表記を當代の日本の教養溢れる知識人たちがこれを読み取ることが既に可能であったことを示唆しています。書くこと即ち読むことへと連続していることを想起させてくれます。では、現代の私たちが此等の語を十分に理会して読み表せるかを問い糺していることにもなりましょう。この意味からも、この説話譚から学ぶ日本語の世界は、計り知れない教養性が潜んでいると云つて良いのではないのでしょうか……。

国語資料としての『今昔物語集』に触れてみよう

ここで実際に、ご自分の読解力を以て、次の震旦部における「楊貴妃」の説話譚を分析なさってみてください。

〈応用編〉

唐玄宗后楊貴妃、依皇寵被殺語第〔第十〕

今昔、震旦ノ唐代ニ玄宗申帝王御ケリ。性、本ヨリ好ミ女ヲ愛シ給フ心有ケリ。而ルニ、寵思シケル后・女御有ケリ、后□后宮ト云ヒ、女御ヲ武淑妃ト云ケル。天皇、此人々朝暮ニ愛シ傳給ケル程ニ、其ノ一人后・女御、相次失ニテレバ、天皇、无限思歎給ケレドモ、甲斐无クテ、只、彼ノ人々似タラム女人見バト、強ニ願ヒ求メ給ケルニ、人ヲ以テ求給ヘ、心无ク思シケム、天皇自ラ宮ヲ出遊行所々見給ケルニ、弘農ト云フ所ニ至リ給ケリ。其所ニ一ノ楊菴有リ。其菴ニ一人翁居タリ、楊玄〔エン〕ト云フ。人ヲ以テ其菴ニ入レテ見給フニ、楊玄〔エン〕一人ノ娘有リ、形端正ニシテ有様ノ微妙事、世ニ並无シ、光放ツガ如キ也。使、此レヲ見テ、天皇此ノ由奏ルニ、天皇、喜テ、「速ニ將參レ」ト仰セ給ヘバ、彼ノ女將參タルニ、天皇此レヲ見給フニ、初后・女御増テ、美麗事倍々セリ。然レバ、天皇、喜テ乍興乘ニ宮ニ將返リ

給^レ。三千人ノ中ニ只此ノ人^{ナム}勝^レタリ^ルハ、名^ヲ楊貴妃ト云フ。然^レ、他ノ事无ク、夜晝^ル翫^レ給^{ケル}程^ニ、世ノ中ノ政^モ不知^ル給^デ、只、春花^ヲ共興^シ、夏^ハ泉並^テ冷^ミ、秋^ハ月相見^テ長^ク、[v.10.p.31-32]冬^ハ雪^ヲ一人見^給ケリ。此^レ、天皇聊^ク御暇^モ无^ク、此ノ女御御兄^ニ楊國忠ト云^{ケル}人^ニ、世^ノ政^ヲ任^給タリ^{ケル}。此^レ、依^テ、世^ノ極^ニ歎^{ケル}有^{ケル}。然^レ、世^ノ人^ノ云^合、様^ハ、「世^ニ有^{ラム}人^ハハ男子^ヲバ不^レ儲^ク女子^ヲ可^レ儲^キ也^リ」ト^ソ繚^{ケル}。此^レ、世^ノ騷^テ有^{ケル}ハ、其^ノ時^ノ大臣^ニ、安祿山ト云^フ人有^{ケリ}、心賢^ク思量^有ケル人^ニ、此^ノ女御^ノ寵^ヲ依^テ、世^ノ中^ノ失^ル事^ヲ歎^テ、「何^デ此^ノ女御^ヲ失^ナテ世^ヲ直^サム」ト思^フ心^有テ、安祿山、蜜^ニ軍^ヲ調^テ王宮^ニ押入^ル時^ニ、天皇恐怖^レ給^テ、楊貴妃^ノ相具^{シテ}王宮^ヲ逃^給、楊國忠^モ共^ニ逃^ル間[、]天皇御共^ニ有^ル陳玄禮ト云^フ有^テ、楊國忠^ヲ殺^シ。其^ノ後[、]陳玄禮、鉾^腰差^テ、御輿^ノ前^ニ跪^テ、天皇^ヲ礼^{シテ}申^テ、君[、]楊貴妃^ヲ哀^給フ^ニ依^テ、世^ノ政^ヲ不知^給。此^レ、依^テ、世^ノ既^{□□}レ^ス。國^ノ歎^ケギ、何^事此^レ過^ム。願^ク、其^ノ楊貴妃^ヲ給^リテ、天下^ノ瞋^{□□}透^{□□}ト。天皇悲^レ心^深愛^ニ不堪^{サレ}、給^フ事^无シ。而^ル間[、]楊貴妃^ノ逃^堂内^ニ入^テ佛^ノ光^立副^隱ト云^ドモ、陳玄禮、此^レ見^付捕^練絹^ヲ以^テ楊貴妃^ノ頸^ヲ結^テ殺^シ。天皇、此^レ見^給フ^ニ、肝^碎心^迷テ、涙^流事[、]雨^ノ如^シ、見^給フ^ニ難^堪。然^レトモ、道理^至依^テ、嗔^ノ心^无シ。然^テ、安祿山^ハ、天皇^ヲ追出^{シテ}、王宮^ニ在^テ世^ヲ政^ツ間[、]即^チ、死^テリ。然^レバ、玄宗、御子^ニ位^讓、我^ト大^政天皇^御ケル^ニ、尚[、]此^ノ事^ヲ思^ヒ不^忘歎^キ悲^給テ、春花^散不知^シラズ、秋^木葉^落不^見ズ。木^葉庭^積掃^人无^シ。日^隨歎^増給^{ケル}程^ニ、方士ト云^蓬萊^行人^ヲ云^也、其^ノ人^參テ、玄宗^申ケル^様、「我^レ、天皇^ノ御使^トシテ彼^ノ楊貴妃^ノ御所^ヲ尋^ネム」ト。天皇、此^レ聞^テ、大^喜宣^{ハク}、「然^ラバ、彼^ノ楊貴妃^ノ有所^ヲ尋^我」[v.10.p.33-34]聞^セト。方士、此^レ仰^奉リテ、上^虚空^極下^底根^國求^ケレドモ、遂^ニ不^得成^ニケリ。而^ル間[、]或^人云^ク、「東^海蓬^萊ト云^フ嶋^有リ。其^ノ嶋^上大^宮殿^有リ。其^ノ玉^妃ノ大^真院^ト云^フ所^有ル。其^ノ彼^ノ楊貴妃^御ナル」。方士、此^レ聞[、]彼^ノ蓬^萊尋^ネ至^ニケリ。其^ノ時[、]山^葉日^漸入^テ、海^ノ面^暗持^行ク。花^扉皆^閑人^ノ音^モ不^為ザリ^{ケレ}バ、方士、其^ノ戸^ヲ叩^{ケル}モ、青^衣着^{ケル}乙^女鬢^上タル、出来^テ云^ク、「汝^何ナル所^ヲ来^ル人^ト」。方士荅^テ云^ク、「我^レ唐^ノ天皇^ノ御使^也。楊貴妃^ニ可^申事^有リ依^テ、此^レ遙^尋来^ル也」。乙^女云^ク、「玉^妃、只^今、寢^給タリ。暫^ク可^待シ」。然^レバ、方士、手^ヲ居^{タリ}。而^ル間[、]夜^{アケ}ヌレバ、玉^妃、方士^ノ来^由聞^ニ、方士^ヲ召^寄宣^{ハク}、「天^皇平^御否^ヤ。亦[、]天^寶十四^年以^来今^日ニ至^マ、國^何□□□□有^ルト。方士、其^ノ間^ノ事^ヲ語^申ス。然^テ、方士^ニ給^マ、「此^レ持^テ天^皇可^{□□□□}ノ事^ハ此^レ見^思出^ヨ申^ト。方士^申□□、「玉^ノ簪^ハ世^ニ有^ル物^也。此^レ奉^タラ^シ、我^ガ君[、]實^思不^食シ。只[、]昔[、]天^皇君[、]忍^テ語^給ケム事^ノ人^ニ不^被知^有ケム、其^レ申^給。其^レ實^思食^サムト。其^ノ時^ニ、玉^妃、暫^思迴^テ宣^{ハク}、「我^レ、昔[、]七^月七^日織^女共^ニ相^見夕^ニ、帝^王、我^レ立^副宣^シ事^ハ、『織^女・牽^星契^リ、哀^レ也。我^レモ、亦[、]此^ノ有^ラムト思^フ。若^シ天^ニ有^バ、願^翼並^鳥成^ラム。若^シ、地^ニ有^バ願^枝並^木成^ラム。天^モ長^地久^クシテ終^事有^ラバ、此^レ恨^綿々トシテ絶^ユ事^无』申^セト。方士、此^ノ言^聞返^テ、此^ノ由^ヲ天^皇奏^レバ、天^皇弥^悲給^テ、遂^ニ此^ノ思^ニ不堪^{シテ}、幾^ノ程^不經^失給^ニケリ。彼^ノ楊貴妃^ノ被^殺所^ニ、思^餘、天^皇行^給見^給ケル時^ニ、野^部風^並寄^哀也。彼^ノ天^皇御^心何^許也。然^レ、[v.10.p.35-36]哀^{ナル}事^ノ様^云、此^レ云^フナル。但^シ、安^祿山^殺、世^直為^{ナレ}バ、天^皇否^不惜^給也。昔^人天^皇大^臣道^理知^此有^{ケル}トナ^ム語^リ傳^ハタルトヤ。

如何でしたでしょうか？何か、ご自身でお気づきのことがあるれば、これを「メモ書き」にして、使用語彙を上記に示した他の文献資料などと比較検証してみましよう。「和語」と「漢語」、そして、漢字表記の語とカタカナ表記の語とのバランス、これに基づいて譚話内容の継承とその受容性などを考えて、この時代における日本語の特徴を鑑みてください。

※ 一九六一年(昭和36年)3月 小林芳規「平安時代の平仮名文に用いられた表記様式1」(『国語学』44)
一九六一年(昭和36年)6月 小林芳規「平安時代の平仮名文に用いられた表記様式2」(『国語学』45)